

「アナウンサーさーん」。ステージの講演者から声を掛けられました。舞台袖の暗がりには私は、何だろっ、と一瞬、音響さんと顔を見合わせて、とにかくステージに出ました。

「私の話は、何時まででしたかねえ」。予想外の質問に一瞬、戸惑いました。おおよその流れは頭に入っていました。正確な時刻は台本を見ないとわからない。ですが、咄嗟に答えました。

「まだ、時間は十分ございます。5分前に、私が此処に立つことでお知らせしましょう。それま

アイスブレイク

フリーランスアナウンサー 今尾ひな子

で、お続けください」 前のめりの姿勢です。

「それは、わかりやすい」と先生。このやりとりで、会場内にドットと笑いが起こり、一体感が生まれると、小柴先生の独自のまれたように感じました。質問も答えも明快、もしれませんね。場をりわかりやすかったと自負しています。

ノーベル賞の小柴昌俊博士は、そのタイミングで、内容をガラリと変えて、研究の話から、小児麻痺で苦労された話題に移されました。

それまで自分の掌(てのひら)を懸命につねって耳を傾けていた人も、先生の個人的な話に移ると、にわかに大きな目で、

先生は前半と後半の切り替えに、司会者を使い、最初から織り込み済みであった、そして場内の雰囲気から、センスの良い、気働きをされたのかも。この原稿を書いていて、ふと気づきました。



アイスブレイクは、場の演出にも効果的ですね。水を溶かすように。